もくばいのヒミツ

制作　林野庁近畿中国森林管理局
箕面森林ふれあい推進センター
作/絵　矢放 七海

冬休みのこと、小学生のハルヒはおばさんの家に遊びに来ていました。

「ねえ、おばさん。なんだかおばさんの家ってうちの家とふんいきちがうね。」

「そう？ああ木材でできた物が多いからかもしれないわね。」

「えっとそれは木でできたものってことだよね」

「そう、苗木を育てて切って使うの。木材はずっと大昔から建物や家具とか道具色んなものに使われているのよ」

「なんでそんなに使われているの？」

おばさんがにやりとして言いました。

「それはね。木にはみんなが使いたいと思うすごいヒミツがあるからよ。」

「ヒミツ？どんな？」

「うーんどうお話しすればわかりやすいかしらね。」

おばさんは少し考えると言いました。

「そうだ、あなたが今からばいきんよりももっと小さくなったと想像してみて。」

「うーん、こんな感じかな…？うわばい菌でかっ！」

「そうそうそんな感じよ、

小さくなって机の上で木材のヒミツを探る、

そんな冒険ごっこをしてみるのはどうかしら。

小さくなればいろんなことが見えるし、

きっとそのヒミツがわかると思うわ。」

「えっ、おもしろそう、やってみる！」

ハルヒは目を閉じてみました

ハルヒはどんどん小(ちい)さくなって降(お)りていきます。

机(つくえ)の上(うえ)のちいさなちいさな大冒険(だいぼうけん)の始(はじ)まりです。

机がだんだんと近づいてきました。

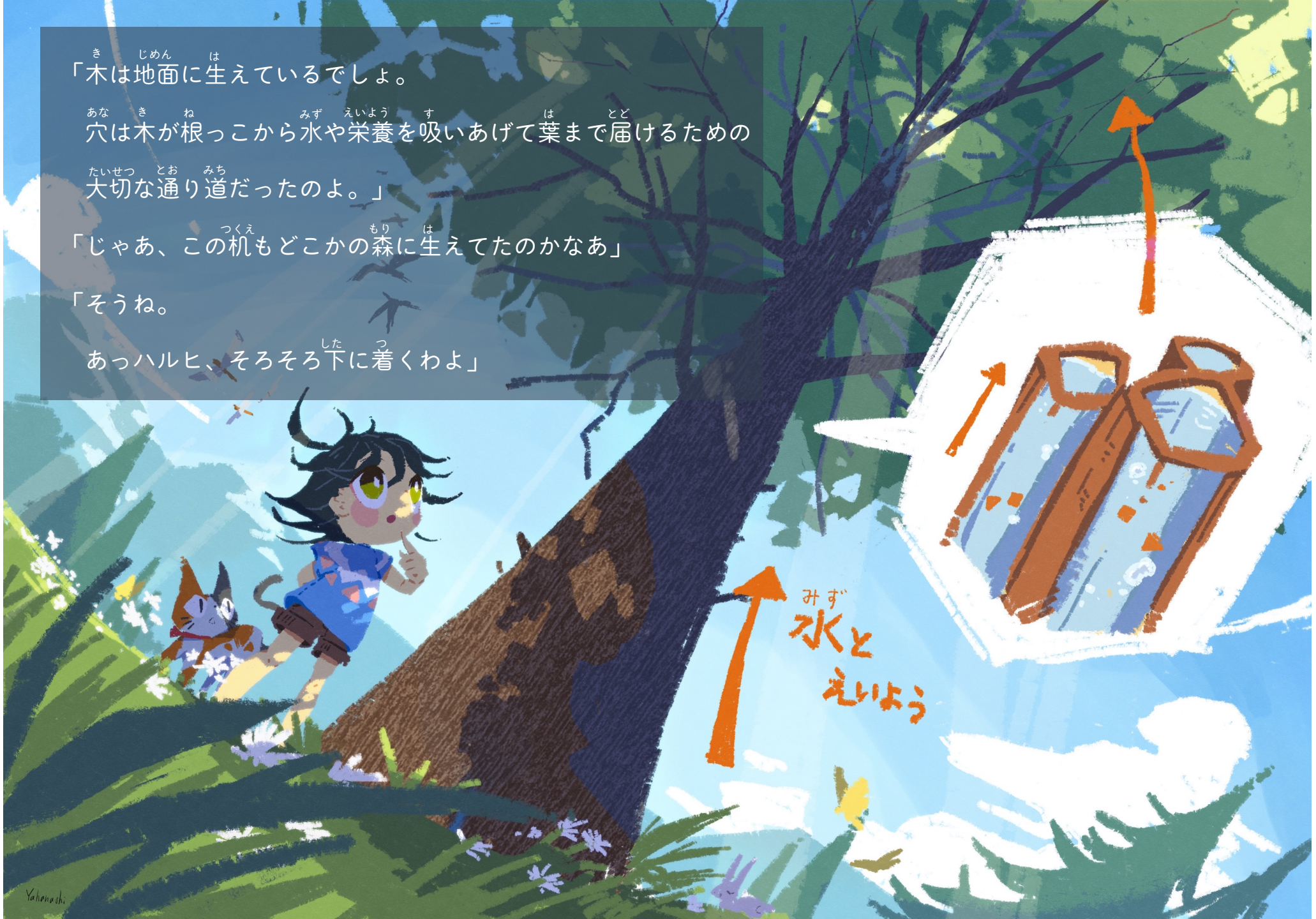
「ええー！ここ机じゃないみたい！

小さな穴がたくさん空いてるよ、何で?!」

おばさんが言いました。

「それはね、木が生きていたあかしなのよ。」

「えっどう言うこと？」



「木は地面に生えているでしょ。

穴は木が根っこから水や栄養を吸いあげて葉まで届けるための

大切な通り道だったのよ。」

「じゃあ、この机もどこかの森に生えてたのかなあ」

「そうね。

あっハルヒ、そろそろ下に着くわよ」

ハルヒは机に降り立ちました。

ボヨン！

「えっなんか柔らかい！」

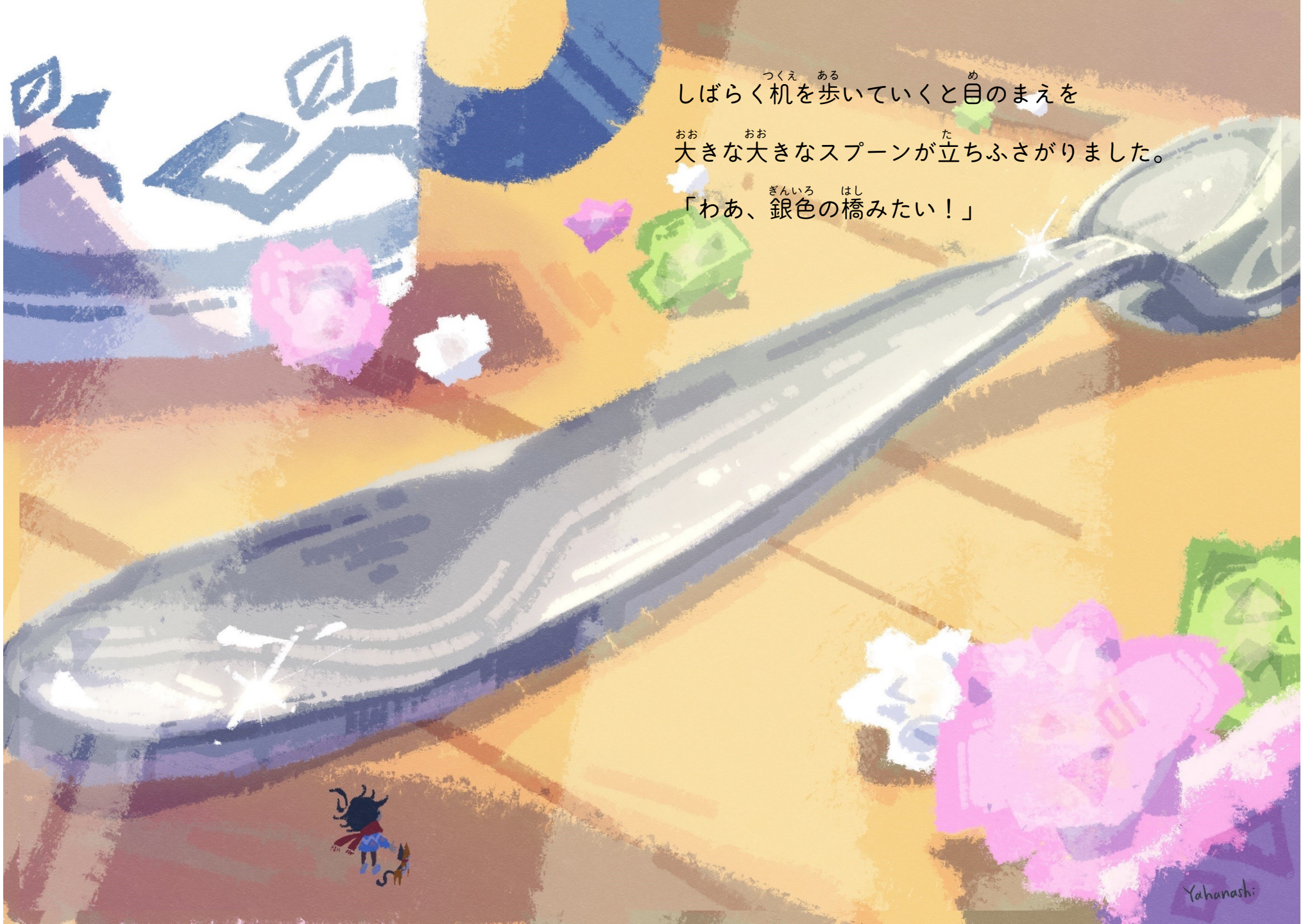
「そうね、木材は穴がたわむことで、

クッションみたいな働きをするの。

だから家や学校の床とか木材が使われることが多いのよ。」

Yahanash

ハルヒは広い机の上をはずむように歩きだしました。



しばらく机を歩いていくと目のまえを

大きな大きなスプーンが立ちふさがりました。

「わあ、銀色の橋みたい！」

ハルヒはスプーンの上によじ登ってみました。

「あれ？木の机を触った時より手足が冷たい気がする！

どうして？」

ハルヒはびっくりしました。

「木にはね、鉄に比べて触った時の冷たさを和らげてくれる

ヒミツがあるのよ。」

「あっ、そういえば机の鉄のところはひんやりするけど、

木のところはひやっとしなかったかも・・くしゅん！」

寒くなってきたハルヒはスプーンの上をかけ出しました。

ハルヒは先まで来ると

スプーンを滑り大きくジャンプして

高く跳びました。

そのまま木の穴の中へ。

ヒューっポンっと入ります。

穴を滑りおりると、中はまるで迷路のよう。

「わあ、ここに水が通ってたのかなあ」

さあ、穴をつたって進んでいきましょう。

少(すこ)し進(すす)んで、ハルヒは座(すわ)るのにちょうどいい場所(ばしょ)を見(み)つけました。

「おばさん、そういえばさっきから良(い)い香(かお)りがするんだけど。」

「木材(もくざい)の香(かお)りね、人(ひと)をリラックスさせたり心地(ここち)よく眠(ねむ)れるようにしてくれるヒミツがあるのよ。」

ハルヒは香(かお)りに包(つつ)まれて少(すこ)し眠(ねむ)りにつきました。

元気(げんき)になったハルヒは机(つくえ)の表面(ひょうめん)にまた出(で)てきました。

「あっ、おばさんの手(て)が見(み)える！おばさーん、ヒミツたくさんわかったよー！」

ハルヒは走(はし)りだしました。

そのときです。

ばい菌が上からやってきました。
「どうしよう！あともうちょっとなのに・・・！」
「落ちついてハルヒ、ばい菌に木材の香りをあてるのよ」
Yahanashi

ハルヒはジャンプして香(かお)りをばい菌(きん)にあてました。
ばいきんはとても嫌(いや)がって逃(に)げようとしています。
「やったあ！」
「ハルヒえらい！ばい菌は木材(もくざい)の香(かお)りを嫌(いや)がるから、
ばい菌(きん)を防(ふせ)いでくれるヒミツもあるのよ。」
Yohanashi

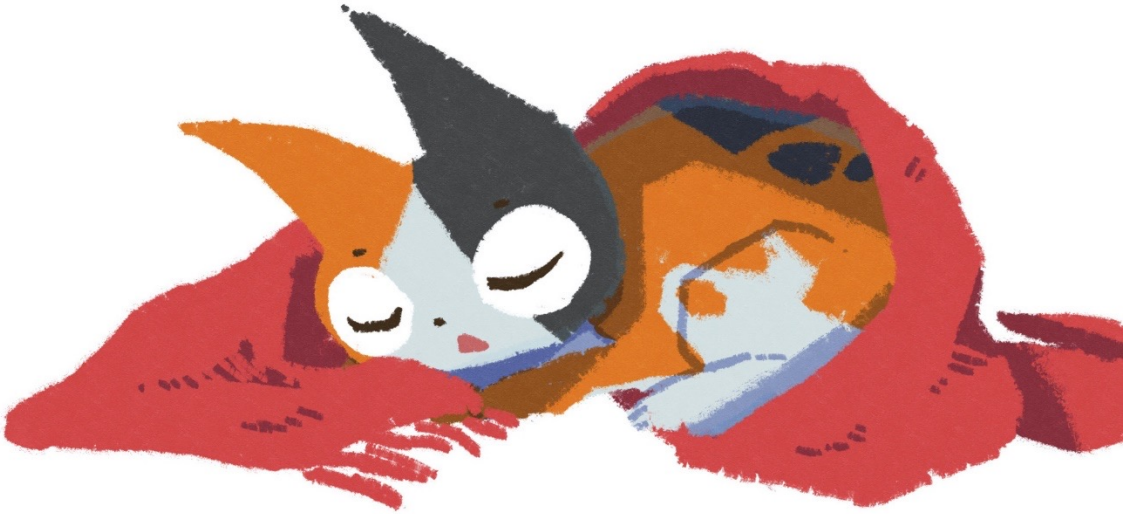
あたふたしているばいきんを踏(ふ)み台(だい)にして

ハルヒは高(たか)く跳(と)び上(あ)がりました。

「ただいまー！」

「冒険ごっこ楽しかったー！木材のヒミツよくわかったよ。」

ハルヒは机に寝そべってみました。

ほんのり冒険の時のあの香りがしました。

おわり